ヒトとAI、共存へ期待

写真左から、池谷裕二東京大学薬学部教授、久住眞理人間総合科学大学学長、司会進行役の人間総合科学心身健康科学研究所所長の小岩信義氏

早稲田医療学園創立70周年、人間総合科学大学が記念講演会

11/3、さいたまスーパーアリーナTOIRO

「AI時代のこころとからだ」テーマに対談

1953(昭和28)年に東京都新宿区、高田馬場で産声をあげた早稲田医療学園は今年10月、創立70周年を迎えた。「人々の幸福と健康を支援する人材の育成」を掲げ、保健・医療領域のプロフェッショナルを多数、輩出している。

同学園の理事長で人間総合科学大学の久住眞理学長は11月3日、さいたまスーパーアリーナTOIROを会場に、東京大学薬学部教授の池谷裕二氏を招いて記念講演会と対談を行った。当日の様子を紹介する。

小岩　本日の対談テーマは「AI時代のこころとからだ」。本学では「右手にライセンス、左手に生きる力」の修得を目指す。この「左手に生きる力」こそ、池谷先生をお招きした理由。

予測困難な未来社会、AIという新たな環境に感じる恐怖に、こころとからだの相関の科学がどう貢献出来るか、会場の皆さんと一緒に考えていきたい。

久住　35億年以上前の生命の誕生と、現生人類が生まれておよそ20万年の歴史の中で、環境に適応して生き残ってきた。そこに我々が求めるべき回答があるのでは。

人間はあらゆる自然、環境の変化、ストレスに適応し、生き延びて今日に至った。ストレスを生きる力に変えてきた人間のすごさ、底力を感じている。

池谷　今はまだAIが何者か見えていない状況。新しい環境、要素として捉えると、恐れではなく喜ばしいこと。

AIは知能を持つが、人間のような脳は持たない。算盤の成分研究や電卓を分解しても計算の本質・原理は解明できない。脳を分析しても知能については分からず、AIや色々な知能が見えてきて初めて、知能とは何かが分ってくる。

今はその入り口で、固定観念を捨て、一歩引いた観点から人間について考えるきっかけをくれた、刺激的で面白い時代。

違いに気付く脳の性質

小岩　会場からの質問で「人間はおのずとこの環境に適応できるか」と。

池谷　第1次産業革命で人々は不安に陥ったがやがて適応した。人工知能にも適応していくだろう。「おのずと」なのか悩むのは、勉強が必要だと思うから。人間側に選ぶ力、センスが求められている。

久住　自己実現の欲求は愛や希望、人の役に立ちたい欲求と、一方で支配欲求もある。人は幼児的万能感や未熟な願望を膨らませずに、失敗と成功の経験を積み重ね、努力することが大事。AIを御子から暴君にしないため、社会を便利に豊かにしながらも決定権はAIにゆだねずにいたい。

池谷　出世欲や単に高みに行くことだけを目標にせず、楽しむことが素敵でそうあって欲しい。楽しいことばかりではないが、それすらも楽しんで続けて、結果的に高みに到達する、そうありたい。

久住　池谷先生の研究者としての楽しさが、よく分かる。人間は誰しも幸せになりたいが、幸せは“なる”のではなく、感じるもの。AIに助けられ、人間と和音を奏でられる、そういう使い方をする人としての責任、上手に発展させることが大切では。

池谷　脳は同じものを同一視し、違いには気が付きやすい性質がある。テクノロジーで世の中が変わった部分にばかり目が向くが、AIが出てきても変わらない部分も実は多い。

人間がやるべきことはあまり変わっていないし、たぶん、これからも変わらない。変化にばかり気が付いて、不安になるのが脳の癖だ。

研究者、教育者として

小岩　私たちは動じることなく冷静に、教育や心身健康科学を考えていきたい。研究者として、未来の予測は難しいですか。

池谷　5年前、「池谷AI融合プロジェクト」を始めた時、予測はたてたが今、こうなるとは思っても見なかった。予測が外れるだろうという自信もあって、わくわくする。予想通りではつまらないし、これからどうなるのかと、期待しながら研究する方が楽しい。

久住　新しい展望と未来を切り開く自己決定能力、勇気を持たなければならない。歴史の中で、ドンと変わりえない人間の代表が、我々教育者なのかもしれない。

池谷　未来がどうなるか予測できないからこそ、大切なのは適応力。その原動力は知的好奇心。変わっていない部分こそが人間の本質で、縄文時代から「楽しむ点で、人は変わっていない。

小岩　これからの時代どうなるのか不安に思っていた人も、本日の講演と対談を聞いて、安心したのでは。

ありがとうございました。

池谷　原動力は知的好奇心
久住　変わりえぬ教育者

第1部で講演する池谷裕二氏

池谷裕二（いけがや・ゆうじ）氏

1993年東京大学にて薬学博士号を取得。2014年より現職。専門分野は大脳生理学。とくに海馬の研究を通じて、脳の健康について探求している。2018年よりERATO脳AI融合プロジェクトの代表を務め、AIチップの脳移植による新たな知能の開拓を目指している。

文部科学大臣表彰若手科学者賞（2008年）、日本学術振興会賞（2013年）、日本学士院学術奨励賞（2013年）などを受賞。主な著書に『海馬』『記憶力を強くする』『進化しすぎた脳』など。

新しい時代の不易流行
―よりよく生きるための知恵―

人間総合科学大学の母体となる学校法人早稲田医療学園は昨年、創立70周年を迎えた。「人々の健康と幸福に寄与する人材の育成」を教育理念に掲げ、これまでに約2万2千人の卒業生が巣立ち、社会で活躍している。昨年11月に記念講演会をさいたまスーパーアリーナで開催し、東京大学薬学部教授の池谷裕二氏の講演と久住学長との対談も実現した。

「真摯に向き合ってきた年月を振り返って感謝しつつ、感じたことは、“不易流行”、つまり不変の中に変化を取り入れていくことの意味、逆に、変化の大きな時代において、教育者として変わりえない部分を確認できたことです。」

「真摯に向き合ってきた年月を振り返って感謝しつつ、感じたことは、“不易流行”、つまり不変の中に変化を取り入れていくことの意味、逆に、変化の大きな時代において、教育者として変わりえない部分を確認できたことです。

その「幸せになりたいという本能、本質的な欲求を持った人間にとって、よりよく生きる知恵（Knowledge for Well-being）を育んでいくことが、変化に適応するという点からこれからますます、重要さを増す」と、強調する。

2000年春に創立、今春25年目を迎える人間総合科学大学は、「こころ」「からだ」「環境・社会」の相関性を科学的に探求する学問領域「心身健康科学」をコア科目に据える。人間科学部の心身健康科学科、健康栄養学科、ヘルスフードサイエンス学科の3学科、保健医療学部に看護学科、リハビリテーション学科理学療法士専攻・義肢装具学専攻と、大学院に心身健康科学専攻と健康栄養科学専攻を設置、全学科で学生たちが人間を総合的・統合的に理解するための学びを、文理融合型の教育課程の中で展開する。

「AI（人工知能）をはじめ、変化の激しい社会に対応していくことが求められている時代。次の世代を担う、社会・人間・生物の多様性を受容して、“自立”と“共生”の生き方のできる、自己決定能力を持った学生を育てていく」と決意を新たにする。

地域に生きる大学として、産官学連携にも積極的に取り組んで、地域・医療機関・企業との連携を深めながら成果を挙げている。

ここ10年間をかけて、海外、ベトナム・ハノイ近郊に現地法人を設立、日本では初めて東京健康科学大学ベトナムと同大学付属久住病院を新設し、グローバル医療人材育成にも注力し、国内外から注目されていると感じる。

「世の中の流れにもしっかりアンテナを張り、こころとからだ、社会・環境の相関関係を明らかにする心身健康科学の学問で人間を深く理解し、よりよく生きる力につなげて、地域社会で活躍する人材を育てていく」

久住眞理（くすみ・まり）氏

学校法人早稲田医療学園理事長、人間総合科学大学学長。学園の教育理念である「人々の健康と幸福に寄与する人材の育成」に教育者として尽力し、2000年4月に人間総合科学大学を創立。人間を「こころ」「からだ」「環境・社会」の3つの側面から追及する人間総合科学の学問構築と研究を推進している。

主な著書に『運命を変える　心とからだの磨き方』『ヒューマン　私たち人類の壮大な物語―生命誕生から人間の未来までを見すえる統合科学』（共著）

刺激的な対談に引き込まれる会場

人間総合科学大学

人間科学部　健康栄養学科
ヘルスフードサイエンス学科
心身健康科学科（通信教育課程）

健康医療学部　看護学科
リハビリテーション学科
理学療法学専攻
義肢装具学専攻

大学院　**人間総合科学研究科**
心身健康科学専攻 修士課程・博士後期課程
（通信教育課程）
健康栄養科学専攻 修士課程